住民の暮らし激変

台風19号1週間

理容店3世代で被害

台風19号の県内直撃から、19日で1週間となった。栃木市では、親子3代でそれぞれの自宅が浸水被害に遭った人がいた。小山市では、2015年の関東・東北豪雨による被害から立ち直ったばかりの人が再び、今回の台風で自宅が水につかった。佐野市や鹿沼市では多くの住民が今も泥にまみれた家の中の片づけに追われ、那須烏山市では断水で日常生活に困っている人がいる。宇都宮市では、商売道具が台無しになった商店主が「廃業もやむを得ない」と途方に暮れた。

◆栃木

栃木市では、永野川の堤防決壊などにより、県内で最も多い約1万3800棟の住宅浸水被害があった。

柳橋町で明治時代から100年以上続く理容店の4代目店主、長岡和己さん(54)と、隣に住む父・勝男さん(83)、はす向かいに住む長男・剛弘さん(26)の親子3代は、それぞれの自宅が床上浸水の被害を受けた。和己さんの家に併設する店も泥水が入った。

和己さんらの家は、4年前の関東・東北豪雨では浸水しなかった。「まだ大丈夫」。そう考えていた12日午後10時過ぎ、家の周囲を見てみると、急激に水が押し寄せてきた。2年前に新築したばかりの剛弘さん宅にも床上に水が押し寄せ、2階に避難したという。

しかし、勝男さん方は平屋で、隣の和己さん宅に避難させるほかにない。妻・真由美さん(52)が腰まで泥水につかりながら、勝男さん夫婦の手を引いて連れてきて、和己さん宅の2階に避難させた。

水が引いた13日午前3時過ぎから、店を守ろうと、皆で店内の泥をかき出したが、水は床上40センチに達していた。業務用のいす3台、ボイラー、タオル蒸し器などが使えなくなった。

現在は親戚や友人、なじみ客らの手を借りて自宅や店内の片付けをしながら、中古の理容いす1台を借り受け、店の再開を目指す。

和己さんは「助けてくれた人や、営業再開を待っているお客さんのためにも、一日も早く店を開きたい」と話している。

理容店の前で、浸水した当時の様子を話す長岡和己さん（左から2人目）、勝男さん（右から3人目）ら家族。この1週間で店もきれいになってきた（19日、栃木市柳橋町で）